

ノソング氏がコンゴブラザビル教会4代会長に就任して以降は、コンゴブラザビル出張所を介して、海外布教伝道部（現在の海外部）と教会との連絡が行われるようになった。出張所の建物は日本人会長時代の教職舎をそのまま使っていたので、教会の敷地内にあり、ノソング氏宅とは4～5mの通路を挟んで隣接していた。必然的に毎日顔を合わせ、外出の様子や来訪者の顔ぶれ、時として買い物の中身や食事のメニューまで、お互いの日常生活が見えてしまう状況の下で、本部の出先機関である出張所のメンバーと直属教会の会長であるノソング氏が、教会の運営について話し合い、それぞれの立場で教会活動に関わっていくのであった。

教会内においてノソング氏は「Chef（会長）」であり、コンゴ社会に対しても彼はコンゴにおける天理教の「代表者」であった。1964年12月22日付の内務大臣から交付された天理教の布教公認書には、総務や祭儀、会計係など役員となった4名のコンゴ人信者に先立ち「Chef de l'Eglise（教会長）」としてノソング氏の名前が記載されていた。つまり、会長の就任は彼にとって、名実ともにコンゴにおける天理教の代表者となったことを意味していた。その一方で、出張所は教内における本部の出先機関であり、本部の意向を伝達する側に立つ。信仰的な視点からすれば「おぢばの理の流す」側にあるとも言えるだろう。また、現地サイドから見れば出張所は本部の窓口でもあるので、会長や役員、信者からの意見を聞く役割も担っていた。こうした役目上、教会のさまざまな事情を正確に把握しなければならない。また、信者からの意見や教会の様子を本部へ報告する。このような状況において、現地の「Chef」であるノソング氏の出張所に対する思いは、複雑であったに違いない。この二つの機関が、限られた空間の中で隣接し、当事者たちが毎日顔を合わせる中で、コンゴ伝道が進められていくのだから、時には険悪な仲になっても致し方なかったかもしれない。

あるコンゴ人信者の言葉を借りていうなら、出張所は大使館的な存在であった。教会という領域において、絶対的な存在である「Chef」の権力（コンゴ社会ではよく見られること）が及ばない、また及ぼせることができない治外法権の機関なのである。例えば、出張所の人事に関する権限はノソング氏ではなく、海外布教伝道部の意志決定の下で進められた。教会は本部の財政援助によって運営されていたので、会計報告の義務を負い、その報告の監査は出張所が担うことになっていた。

ところがノソング氏は、この出張所の人事に関してよく口を出した。所長の人選や所員の交代、またその時期などをめぐって、意見が対立することもあった。教会の会計にしても常に不明瞭で、きっちりした報告を求める本部側と報告書を提出しない会長との間で、出張所は難しい舵取りをしなければならなかった。ただ、当時のコンゴの社会的背景から、ノソング氏の意向を考慮しないわけにはいかなかった。それが査証の問題である。

コンゴ入国には入国ビザが必要である。日本人布教師がコンゴに入国する際は、「天理教布教師」という肩書きを持つことになる。したがってビザの申請もその肩書きである。その場合、受け入れる側（コンゴ）の責任者の承諾（署名と捺印）が必要となる。この場合、それは名実とも「Chef」となったノソング

氏だった。つまり、出張所の人事権は本部にあったが、実質的には彼の承認なくして実動させることができなかった。

さらにまた、当時のコンゴには出国時に際してもビザ（出国ビザ）が必要だった。共産主義時代の名残りとも言えるもので、コンゴ人の出国を監視するものであったが、コンゴ在住の外国人にも適用されており、日本人布教師もおぢばがえりや帰国などコンゴを出国する際には、移民局で出国許可を受けなければならなかった。そしてここにも現地の「Chef」であるノソング氏の署名が必要とされた。彼にとってこの査証の存在は、日本人に対して彼の「権限」を発動できる唯一の手段でもあったのだ。

したがって、それは本部との交渉時における一つの「盾」ともなった。実際、彼の要望が受け入れられなかったりすると、署名を拒否し、新たに派遣される日本人布教師の入国を遅らせたり、任期が終了し帰国するはずの日本人の出国を許可しなかったりすることもあった。

ノソング氏の要望は、このような状況の中で叶えられていく。彼自身のおぢばがえりの日程やコンゴ人信者のおぢばがえり候補者の人選、借金の棒引き、派遣される日本人の受け入れに関する事など、通常なら受け入れがたいような条件でさえ、最終的には譲歩しなければならなかったのは、彼が現地の代表責任者だったからだ。さらに言うなら、彼の「私は真柱（2代）から声をかけられ、直々に教を学んだ」という思いと「そのことを日本人も十分認識しているはずだ」という確信も、自身にとって、大きな「盾」となっていたのではないだろうか。

コンゴ人信者の中には、ノソング氏に対する不満を持つ意見が多く聞かれた。とりわけ教会前の住宅街では、ノソング氏をいつまでも「Chef」として留めておく教団のあり方に疑問を抱く声すら聞こえた。診療活動で獲得した教会の社会的信用も失墜の一途を辿った。「彼がいる限り私は教会へ行かない」そんな声も少なくなかった。そうした中、会長排斥の運動が起こったり、また将来を悲観したコンゴ人ようぼくが教会から出て行ったりした。教会から離れた人たちは「会長に追い出された」という思いが強かった。しかし、ノソング氏は彼らを「神を忘れた」「信仰を失った」と批判した。自分についてきてくれるコンゴ人信者が少なくなる一方で、日本人布教師が信者の抛り所となることもあった。このような中でノソング氏は、日本人の存在の重要性を認識しながらもいまだち、「自分がChefである」とことあるごとに叫ばなければならなかった。

4代会長時代、教勢的には伸展したとは言いがたい。会長就任の2年後の1977年には、11年続いた「憩の家」診療所も閉鎖された。ポトポト布教所やルカク布教所も活動が停止した。ただその一方で、ノソング氏の意向を汲んで始められたこともある。会長就任と同時期に彼の意志で開所されたポワント・ノワール布教所と、同じく彼の要望を聞いて始められた鼓笛隊活動である。この二つは現在も活発な活動を続けている。そして何よりも、5代会長となったバゼビバカ氏をはじめ、現在の教会で中心的な役割を担っている人たちの多くが、このノソング会長時代を経験し、その中で信仰を深め、バゼビバカ氏が言うように「そこから多くを学んだ」人たちであることも事実である。